

## 第4回北薩トンネル技術検討委員会 議事要旨

1 日 時:令和8年8月26日(水) 10:00~11:30

2 場 所:鹿児島県庁 18階特別会議室

3 出席者(敬称略)

委員長:酒匂 一成(鹿児島大学)

委 員:砂金 伸治(東京都立大学)

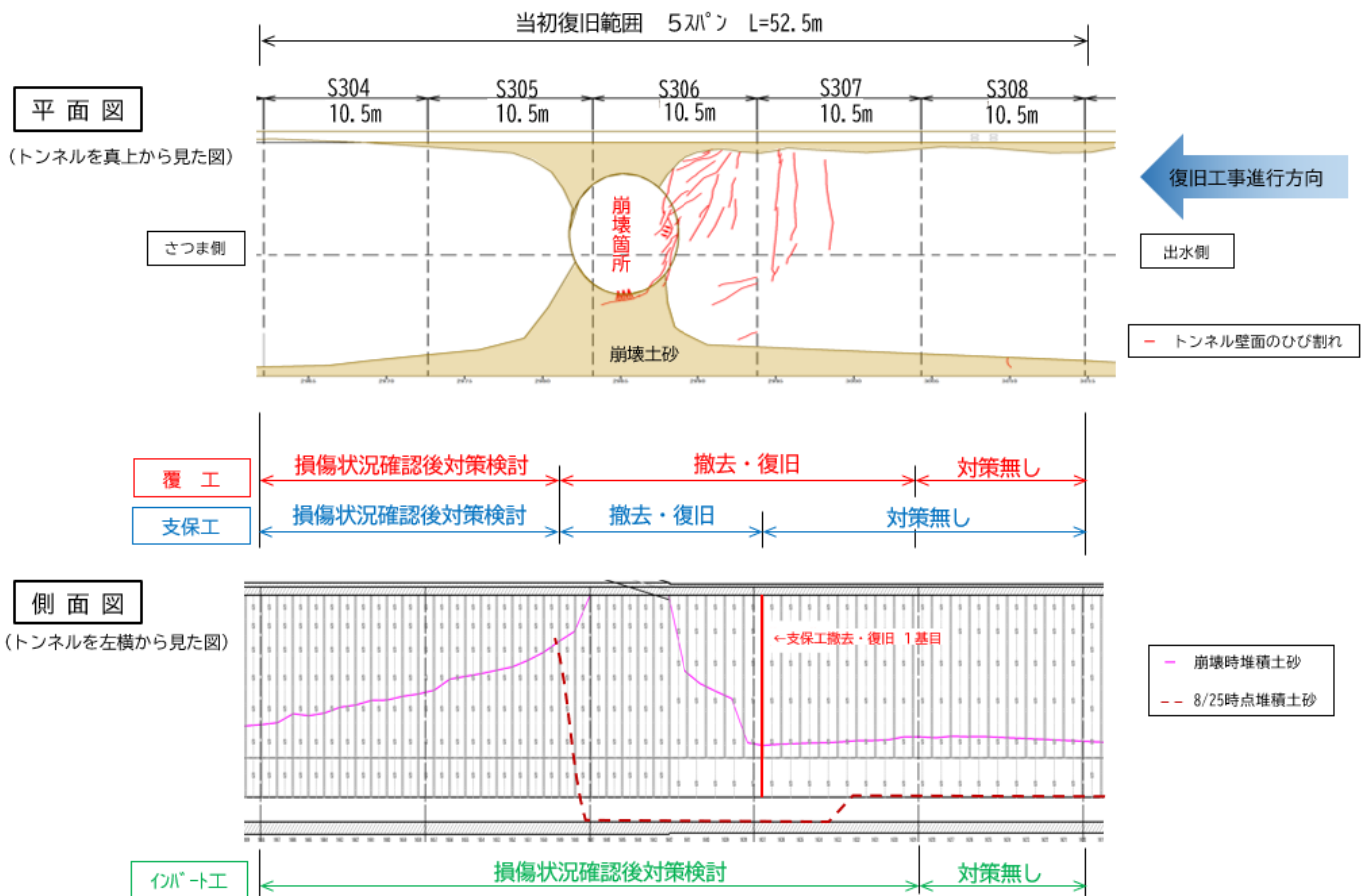
大島 洋志(一般社団法人 日本応用地質学会)

日下 敦(国立研究開発法人 土木研究所)

藤田 智弘(国土交通省 国土技術政策総合研究所)

### 4 議事要旨

- ・ 県から、第3回委員会以降の工事の進捗状況(トンネル外周部の地盤改良、崩壊土砂撤去)、湧水量・地下水位等の観測結果、(水抜きボーリングと水抜き導坑からなる)水抜き工の管理について報告があった。
- ・ 水抜き工の施工により、昨年11月末から今年の梅雨期を含む期間の降雨に対して、被災箇所周辺の湧水量、地下水位及び覆工応力に構造の安定性に影響を及ぼす顕著な変動が見られなかったことや、トンネル外周部の緩んだ土砂の地盤改良が完了したことについて報告があり、崩壊箇所を含む復旧作業が安全に進められていることを確認した。
- ・ 第3回委員会において復旧延長として想定した5スパン52.5m区間のうち、昨日の現場調査では、S307からS306、S305の一部までの約20m区間について覆工コンクリート及び崩壊土砂を撤去し、不可視となっていた支保工及びインバート等の状態を確認した。  
支保工は、S306からS305にかけての崩壊部前後の約5m区間において鋼製支保工の変形や破断等の損傷が見られた。  
また、インバートは崩壊部を含むS306からS307の区間約15mにおいて、部材の浮き上がりや破壊等の損傷が見られた。
- ・ 前回委員会で示された復旧工法及び復旧範囲について、現場の状況を確認した結果、以下のことを確認した。
  - ① 支保工の損傷が見られたS306区間については、S307区間の接続端部からS305区間の今回、不可視部が確認できた約14mの区間は脆弱帯仕様での復旧が適当であること。
  - ② S307区間の残る部分については支保工に損傷は見られないことから、覆工コンクリートのみの復旧とすること。
  - ③ S308区間は覆工コンクリートを撤去していないもののS307区間の状況も踏まえると損傷が無いものと判断できることから対策不要とし、復旧延長から除外することができること。
  - ④ インバートについては、一部浮き上がりが見られたため、損傷状況を踏まえ、今後、復旧範囲を検討すること。(次頁へ続く)



- ・ なお、その先の未だ不可視となっている S305 の残りと S304 の区間については、今後、状態を確認しながら復旧工法及び復旧範囲を検討することが必要である。
- ・ 引き続き、トンネル本体及び水抜き工の状態を把握する必要があるため、湧水量・地下水位・覆工応力等の調査を継続することを確認した。
- ・ 委員会としては、早期復旧に向け、引き続き、県に対し助言を行うこととしている。

